

ある。一九五二・五・一の事件に際して、法の尊敬を説くに熱心な新聞が、官憲に逮捕され幼児を背負つて引かれゆく一女性の写真を載せて、「その証拠には搜索、ガウムを言わずかけた手錠がすべてを物語っている」という説明（歴史学研究、一五八、遠山茂樹氏所論）の根底にある意識と、何と相似たものであるうか。東洋社会における奴隸の性格、前近代的意識の頑強な残存である。これが吾々今日の悲しい現実である。故にこそ中国のこの苦悩も決して対岸と火として見すごされない。本書の内にこそ吾々に内省の資を与えんという博士の悲願があふれ出ているものではないなからうか。本書は凡そ法制史家、中国史研究者のみならず、東洋社会を知らんとするものの必読書であると信ずる（昭和二十六年六月、岩波書店発行、岩波全書、三六三頁、三二〇円）——間野潜龍

L. Timmerman, DAS EUPENER LAND UND SEINE GRÜNLANDWIRTSCHAFT

(Im Selbstverlag des Geographischen
Instituts der Universität Bonn, 1951)
イギリスをはじめデンマークからスウェー

・ポルトガルにかけて、湿潤な大西洋気候地域の北岸を帯のように分布している牧地の美しい生垣景観（Hecklandlandschaft）は、資本主義的な純粹牧畜経営の発達している西欧独自の風景の一つである。虫喰鳥やつぐみ等のさえずる声さえ聞えるカシヤや白華の繁みが、広い牧場や採草地をはつきりと線劃して、所有権を明示している景観は、西欧における農対近代化の具象的なメルクマールでもある。夏季、風夜をわかつ放牧される家畜群を激しい陽光や風雨から保護することも出来るこの生垣に対して、西欧ではその周辺部の微気候学的調査さえ行われている。このような景観を背景として、如何なる牧地経営（Grünländwirtschaft）が行われているか。その具体例の一つとしてのオイベン地方の農村生活を取扱つたのが本論文である。

ヨーロッパ農村は地理的に二つのタイプに大別される。一つは麦作経営を主とする集村地域であり、もう一つは牧地経営に重きをおく散村地域である。ウェストファリア——フランドルと続くライン下流の散居牧畜地域が、中世以来、伝統的な集村地域のヨーロッパ史

に対して、たえずユニークな刺戟を授けかけながら、独自の途を歩んだことは周知の史実である。ここで述べられるオイベン地域は、この後者に属している事を附言しておく。

	山羊	羊	豚	牛	馬	
家畜頭数	204	334	4743	18644	575	1914年
	26	279	2551	18728	573	1941年
密度	—	0.23	3.63	171.7	8.8	1941年

羊・山羊等が集約的に飼育されており、バター・チーズ等の生産も大規模に行われている。総利用地面九一〇六haのうち、九八%の八九二三haが牧地に利用されている（一九三二年）。それを経営規模別にみると別表のごとくである。このうち二ha以下の零細経営者は牧畜以外の工業・手工業に副業を求めているが、漸次その比率は減少している。いちじるしい特色は大農がすくなく、例え大農が存してもその土地は一〇〜二〇ha毎に分割されて小作に貸与されていて、中農層が圧倒的な

経営規模別	経営者数	その%	経営地面	その%
2ha以下	212	18.9	337.41	3.8
2~5 ha	226	20.1	788.95	8.8
5~20ha	630	56.3	6595.60	73.2
20ha以上	52	4.7	1287.20	14.2

事は注目すべきである。

ここで著者は、牧場と採草地の牧草や雑草の種類及びその卓越した管理方法を述べた後で、牧畜労働を季節的に説明する。早くも一月〜一月には、冬の間に集められた堆肥を牧場にまいて牧草の成長を計る。三月も終りになると牧地は水々しい緑色でおおわれる。天候が許すかぎり家畜の群は昼夜共に放牧され、農事カレンダーが忙しく回転しはじめ。放牧した次の日から、すぐれた肥料価値

勢力を持つていることである。末子相続が一般的で、他は土地を離れるので経営の零細化・分散化が防止され、Eifel その他の地域で最近二〇〇年間にみられたような土地整理 (Flurbereinigung) は、この地域では実施されなかつたにもかかわらず、保有地の激しい細分や分散の事実がない

をもつ家畜の糞尿が万遍なく施肥され、雑草の繁茂を丹念に予防する。乳牛は、放牧後も始めの二、三日は夜だけ厩に入れて保護するだけでなく、一日に二回も乳をしぼるので、全期間屋敷に一番近い牧場 (Hausweide) で飼育される。また仔牛も、他の家畜と一緒にでは駄い蛋白質の飼料を充分とることが出来ない、その上毎日脱脂乳を飲まなければならないので、Hausweide に放牧される。ところが比較的手のかからない大牛は、家から遠く離れた Rinderweide に放たれ、一度放牧すると、秋、既に再び入れるまで、そのままにしておかれる。極度に集約的な Hausweide と粗放的な Rinderweide の間に乾草採拾場があり、一部には果樹も栽培されている。ここに我々は、屋敷を核とした同心円的なチエーネンの圈構造をみる事が出来る。牧場には人工肥料の施されることは珍しいが、採草地には二、三年毎に、早春、窒素肥料や磷酸肥料を施す。採草地と牧場の面積の比率は、平均三五・四〇％対六〇・一六五％である。

これらの家畜生産物はバター・チーズの形

でアーヘンやその後背地その他に販売され、その収益で主穀類を購入する。ここで著者は、輸送方法・政治関係によつて敏感に左右される商圏の消長について詳論している。

以上のような商業農村的なオイベン地域の牧地・牧畜経営は、この地の自然的条件と密接な関係があるのは云うまでもない。この地域には非浸透性の、水分を含んだ土壌が多く、耕作を続けることが困難であるのに反して、草の成育には好適である。しかし中世の土地利用状態を調べると、かつてはこの地域にも、牧場経営と並んで、畑耕が重要な意義をもつていたことが、次の諸事象から推定されるのである。

イ) 古い耕地名 (Fulden, Fülchengasse, Wülthener-Feld, Lontzen-Feld, Hausster-Feld, Keleniser-Feld, Lynntener-Feld, Hergensweiler-Feld) が残存する。

ロ) 八〇〜九〇歳の農民は、古くはこの地で穀物耕作が営まれていたことを物語っている。

ハ) 一九世紀初頭には、附近の都市に穀類が移出され、その輸送路は今日なお "Korn-

kelahn", "Kornbuhn" とよばれて残っている。

二) 古い屋敷には今日なお穀倉や納屋が附属している。勿論これらは既に改造されているものが多い。

ホ) 古文獻にも豊富な証拠が存在するが、ここではその数例を示すにとどめる。「千四百八年、ゲラルド・フォン・リベルメ事、父親死去仕候に付、家屋敷併びにそれに附帯致候百モルゲンの田地、二拾モルゲンの草地を相続仕候。」「メイス・ホエシユ、千四百七拾九年、五拾四モルゲン半の田地と拾モルゲン二拾五の牧地を所得仕候。」「千五百二拾三年三月六日、ハイン・ホエシユ事、亡父の遺産相続仕候以来、逐次特分地を拡張致し、八拾モルゲンに達し候共、牧地はわずか拾ハモルゲンにて候也。」

少くとも一五世紀以来、燕麦・ドイツ小麦・ライ麦・小麦および大麦の耕地が存在したのであるが、一方、他地域の農村とは異つて、牧畜とミルク経営も古くから発達していたことが、一五、六世紀の文獻に所見し、且つ現在残っている古い畦道の名前 "Fingars"

"Zur Viehwähe", "Viehweg" によつて知ることが出来る。すでに一六世紀には、バター・チーズの生産も行われており、一六三一年の "Johann Aophtus 年代記" によると、当時オイベンが属していたリンブルグで産する良質の酪製品がアーヘンに販売されている。

当時から一般の農村地域とは反対に、農耕地は屋敷から離れたところにあり、牧場や採草地が屋敷附近に集中していた。農耕地は開放耕地をなし、三圃農法が強制的に行われていたが、屋敷の傍の Hausweide (Gangweide) は夜の牧場として利用され、既に生垣で囲い込まれていたことが、当時の文獻に所見する "Heg", "Rontehage", "an scappe Heg", 又は "an die lange Heg" 等から推定される。この地域の生垣景観の起源は非常に古く、既にシーザーのガリヤ戦記二巻にも, Sambre と Schelde 間の当時既に森林のなかつた土地は、生々しい生垣の稠密な網でおおわれていると記されている。

近世が訪れると共に、次第に農地の占める比率は減少して行く。そして採草地には既にクローヴァが栽培されている。粗放的な羊の

年		菜	園	農耕地	牧場・ 採草地	森	林	ハイデ	道路・川
1812	ha %	194,68 2		1,049,18 10.7	4,132,72 40.2	2,817,15 28.8		1,416,51 14.5	373,48 3.8
1827	Morgen %	857,00 1.1		8,695 10.8	34,605,00 43.1	25,228,00 31.5		7,605,00 9.4	3,286,00 4.1

んどう。四年目、ライ麦とクローヴァ。五一〇年目、飼料乾草。

一九世紀を通じて農地の後退、牧場・採草地の増大は次表に示すごとく年毎にすすみ、

飼育が消滅して、集約的な牛の飼育が発達し、三圃耕地の休閑地にも、施肥して馬鈴薯や甜菜やクローヴァ等が栽培され、改良三圃農法の普及をみることになった。また採草地にも、クローヴァや豆科植物を植えることによつて乾草の価値が高まつた(二年目、カラス麦。二年目、馬鈴薯。三年目、ライ麦とクローヴァ。四一八年目、飼料乾草。又は三年目、豌豆・大豆・やばい)

年	農地・麥圃		採草地		牧場		ハイデ	
	ha	%	ha	%	ha	%	ha	%
1864	1038,0	12.5	4077,0	47.1	3441,0	39.7	61,0	0.7
1873	901,6	10.0	4617,5	51.4	3407,0	38.0	59,1	0.6
1883	735,2	8.1	4701.1	51.9	3621,8	40.0	—	—
1893	401,6	5.4	4553,9	49.4	4122,7	44.8	39,1	0.4
1907	359,0	3.7	4847,0	50.9	4307,0	45.2	14,2	0.15

1864年—1907年の土地利用の変遷

観への進化はつきりとあらわれる。

ここで著者は、一九世紀における労働の季節的配分を述べ、男子は主として戸外における激しい野良仕事、生垣の修理、家畜の管理等に従事するので、機械導入まではバター、チーズの生産は婦女子の手に委ねられていたこと、牧畜の発展と共に、従来農業出稼人は、今

九〇年代になると、家の近くの牧草地も牧場にかわり、輪作農業も脱落し、畠仕事はも早や必要がなくなり、逆に牛頭の増加がいち

じるしく、生垣が牧地一面にひろがって、現在の景

や乾草収穫に備わることになったこと等を目指している。

我々はオイベン地域の近代的酪農村化のコースを追究することによつて、ヨーロッパ農村の近代化のコースが、所謂「主穀生産的農村→牧羊・農村工業的農村」という図式で律しうる程しかく一面的なものでなく、その地域社会のおかれていた「場」の条件に対応して、きわめて多岐的なものであることを看取しなればなるまい。

中世の多角経営から近世における一面的な牧畜経営への生息分離の原因を、著者は最後に次のごとく分析する。たしかにこの地域の自然的状況は農耕に適當でなく、一九世紀の中葉、その平均収量はきわめて低く、ライ麦は播種の九・六倍、小麦は六・六倍、カラス麦は五・五倍、大麦は六倍の収量しか得ていない。収穫期迄雨が長引くことも稀でなく、古い村年代記にもよく凶作の記事がのせられている。「みかけの上は美事な収穫なるも、雨にてライ麦は倒され、再び芽を出せる程

なり。小麦もカラス麦も黒穂病なり。八月まで大雨降りつづきて収穫一向にはかどらず、九月も末というに仕事数多残れる有様なり。

馬鈴薯も湿地にては枯れたり「歴代ヘルゲンラート市長年代記」。このような自然的条件は、次の経済的条件と呼応して、はじめて上記のような純牧畜経営を出現せしめることになったのである。すなわち農民達が、フランス革命およびそれにつづく苦難の時を経験した後、再びよみがえつた平和は、以前とはちがつて農民の位置を悪化し、いちじるしい穀物の暴落を招いたのであつた。一方、交通の発達により、他地域の主穀類が自給食糧よりも安価に移入することが出来、さらに一九世紀も末になると、ドイツ経済全体が世界経済の中に拡大し、各種の穀類が北米・アルゼンチン・南ロシアから大量に廉価に輸入されることになり、オイベン地区は、畜産経営に自らの地域的分業を確立したのである。

(水津一朗)